

篠栗四国八十八ヵ所霊場

— 地方霊場をめぐる一考察 — (下)

豊島和子

The Eighty-eight Sacred places of Sasaguri-Shikoku (II)

— Evolution of local sacred places —

Kazuko Toyoshima

関西外国語大学研究論集 第64号 抜刷

Journal of Inquiry and Research

No. 64

August 1996

Kansai Gaidai University

Osaka, Japan

篠栗四国八十八カ所霊場

— 地方霊場をめぐる一考察 — (下)

豊島和子

本論集第62号では、福岡県粕屋郡篠栗(ささぐり)町内の篠栗四国八十八カ所(以下、篠栗霊場と記す)の形成と展開を知るため、(1)篠栗霊場の研究史(2)地方霊場とは(3)篠栗霊場の形成(4)札所の発展と変遷(5)篠栗霊場の巡拝路について述べてきた。本稿ではその続きとして、霊場発展の要因を検討し、次に霊場の現状とその特徴をみることにしたい。

(6) 篠栗霊場の発展要因

現在、賑わいをみせる篠栗霊場の発展を考えると、まず安政2(1855)年といわれる霊場の開創前後にさかのぼって、当時の霊場をめぐる社会的状況を知る必要があると思われる。『篠栗町誌歴史編』によれば、篠栗町というのは慶長年間(1596-1615)に、山麓に点在していた民家を集め、宿駅として始まったという。¹⁾そこは博多-飯塚間を結ぶ篠栗街道(現・国道201号線)の要衝の一つとなり、また「問屋場」を設けて、筑豊地方へ牛馬で荷を運搬するなど、運送業も盛んであったらしい。明治期に入ると、町内では金出・高田・篠栗・津波黒などの各旧村で石炭の採掘が本格化し、第2次世界大戦後まで、粕屋炭田の一角として機能していた。そしてこの石炭輸送の目的で、明治36年には、九州鉄道が吉塚-篠栗間(10.3km)を開業するに至っている。²⁾このように産業の活発な町の様子が窺える。また文政4(1821)年に完成したらしい『筑前名所図会』には、篠栗町の名所が若干紹介されている。それは前述の「篠栗駅」の他、弘法大師修行の地と伝承される若杉山の「太祖神社」や、「山伏谷」「平家岩」「萩の尾越」といった民間伝承のある溪谷や難所の道などである。特に同図会は「平家岩」の箇所ので、「其幽なる事桃源の趣あり」と結んでおり、よく知られた景勝の地であったことが理解される。³⁾

このように篠栗町は霊場創設以前から、宿場町・問屋町として交通の往来が頻繁で、後には「篠栗い行きゃあ、何でも揃う」⁴⁾と言われるほど、商売も盛んな土地であった。それと同時

に、景勝地としても知られており、潜在的に多くの人びとを引きつける要因をもっていたと言える。明治になると、炭鉱の町として活況を呈するのであるから、創設してまだ日の浅い霊場を支えるには、人的流動性という点ではかなり恵まれた条件が整っていたようである。

このような状況のなか、すでに62号で述べたように、1番札所・南蔵院住職の林 覚運師を中心とする霊場側の積極的な布教活動が行われた。そして炭鉱や漁業に従事する人びとを中心に、巡拝者が飛躍的に拡大するようになった。同時に、一般家庭の無償提供である「善根宿」から出発した宿泊設備も比較的早くから整っており、多くの人びとを受け入れることができた。⁵⁾

この霊場を盛り立てる巡拝者の数については、(4) 札所の発展と変遷の項に、大正10年における2札所の報告を記しているが、月別では、一年を通じて特に4・5月と9・10月が群を抜いて多い。これは九州地方では顕著な「千人詣り」の習俗と関連しているのであろう。『糸田町史』によると、「千人詣り」とは春秋の彼岸頃、村落の住民が期日を定め、多人数で各地に勧請された八十八カ所札所へ、御詠歌を唱えながら巡拝する習俗を指す。この糸田町では、先達に率いられた10-15人位の巡拝者が篠栗霊場へよく出かけたそうである。そして霊場の最盛期には、九州一帯や中国・四国地方から臨時列車で春秋に「千人詣り」をしたという。⁶⁾ ところで、各地の「千人詣り」の習俗がいつ頃から始まったのかは不詳であるが、例えば、山口県の大島村では「明治33年に大島八十八カ所が設立され、山アロー(童)の害を防いだこと」から「千人詣り」が始まったという。⁷⁾

篠栗霊場の場合、豊かな自然のなか、全札所を徒歩で3泊4日程かけて廻ることができ、農閑期に巡拝するには手頃な日数といえる。大正期の詩人・野口雨情の作である「さぐり小唄」では、「遍路するなら篠栗四国 里の菜の花さくころに…」と歌われている。⁸⁾ また地理的に博多と近いので、他県からの巡拝にも便利である。特に遠隔地への巡礼・遍路に、社会・経済的な理由で参加できなかった女性たちが数多く巡拝したであろうし、篠栗霊場に女性巡拝者が多いという伝統は今日までも続いている。またそれと関連して、霊場自体も女性と極めて関係の深い札所が多いのである。例えば、『篠栗八十八カ所霊場めぐり』から、初代住職や守堂者が女性であった札所を拾っていくと、10番・切幡寺(恵良尼)、14番・二ノ滝寺(慈光尼)、28番・大日寺(林真光尼)、40番・一ノ滝寺(瓜田智全尼)、65番・三角寺(浄念尼)などが挙げられる。そのうち、慈光尼という住職は、明治27年に生まれ、前述の林 覚運住職のもとで出家をした人である。尼は質素な生活を送ったが、巡拝者に心のこもった精進料理を接待したことが評判となり、同寺には年間、3000人もの宿泊者が集まり、信者が増加したという。⁹⁾ 後述するが、霊場がどのように女性の信仰を集めたかは、札所境内に合祀されている多くの淡島像や淡島堂からも窺える。それとともに目を引くのは39番・延命寺で、その境内には昭和47年に遊女供養塔が建立されている。願主は楼主の息子となっている。¹⁰⁾ さらにその他の多くの札所

では、水子地藏や子安堂などが見受けられ、女性の切実な苦しみや願いを受け入れる場所として知られていることがわかる。この女性と九州地方の漁民の人びとの信仰が、戦後の炭鉱閉鎖後も、篠栗霊場を維持する原動力の一つになったことと思われる。¹¹⁾

(7) 篠栗霊場の現状と特徴

初めて篠栗霊場を訪れた人びとは、霊場の醸し出す独特な雰囲気とその活力に圧倒されることだろう。夥しい石仏と、奉納された洗米や一円玉に目を見張る。また境内で、素足のまま、お百度を踏む信者や、霊場内の滝で修行をする祈祷師もいる。これら全ては、「地方霊場」にイメージされる、静けさに包まれた鄙びた札所の姿と大きく異なっている。

篠栗霊場は四国八十八カ所札所の地方版として、弘法大師信仰を基層にもつ霊場である。しかし現実には大師信仰だけではなく、さまざまな民衆の宗教的欲求を満たす場を提供している。それがこの霊場をどこよりも繁栄させている大きな原因であろう。そこでその実態を種々の面から考察してみよう。

1) 滝行の場としての篠栗：

宝満山修験の峰入りの山であった若杉山を中心とする篠栗一帯は、古くから山岳修行の場として開かれていた。16番・呑山観音寺のパンフレットに、筑前の山々を巡る「回峰の行」が記載されており、それによると若杉山は英彦山を出発点とする回峰行のルートに当たっている。それは英彦山からまず北九州と直方市の境界にある福知山へ向かい、次に八木山と犬鳴の中間に位置する野美山（現・呑山）を経て、若杉山へ至る。そこから最後に三郡山から宝満山へと一巡したという。若杉山が弘法大師修行の地の一つであったという伝承はともかく、近世には、石井坊（石泉寺）という龍門山派修験道場があったことは知られている。¹²⁾ このような山岳修行の場を背景に、篠栗は近世多くの修験者を引き付けたらしく、篠栗霊場創設を発願した慈忍尼も現45番札所・城戸の滝不動堂の傍にある「不動の滝」で修行をしたという伝承がある。34番・宝山寺には、英彦山修験者が峰入り道場と定めた岩場である「金まき岩」があり、そこで21日間、滝に打たれて修行をしたという。現在でも篠栗霊場には次のような札所に滝がある。

- | | |
|--------------|---------------------------|
| (1) 10番・切幡寺 | 「金剛の滝」 |
| (2) 12番・千鶴寺 | 「千鶴ヶ滝」(石槌山千鶴ヶ滝修験道場となっている) |
| (3) 14番・二の滝寺 | 「二の滝」(滝壺近くに座禅石がある) |
| (4) 34番・宝山寺 | 「紅葉ヶ滝」 |
| (5) 39番・延命寺 | 「延命不動の滝」 |

- (6) 40番・一の滝寺 「一の滝」「神代の滝」
- (7) 45番・城戸の滝不動堂「不動の滝」
- (8) 50番・郷の原薬師堂 「五剣の滝」(上記「千鶴」「紅葉」「五剣」の3つの滝を「袂の3滝」と呼ぶ。この一帯は英彦山修験者の峰入りルートにあたり、「郷の原(ゴウノバル)」という地名も「行の原」から出たと言われる。
- (9) 63番・天狗岩吉祥寺 「天狗の滝」
- (10) 65番・三角寺 「清浄願ヶ滝」
- (11) 66番・弘照院 「御手洗(みちょうづ)の滝」
- (12) 68番・岡部神恵院 「屏風の滝」
- (13) 70番・五塔の滝 「五塔の滝」
- (14) 番外・奥の院 「養老の滝」

ミニチュア化した「地方霊場」のなかでは、このように多くの滝が点在していることが篠栗霊場の特徴であろう。篠栗の伝承者である故・西 義助氏によると、以前は滝の傍らに禪と腰巻きが用意されており、人びとはそれをつけて滝に打たれて行をしたという。山地にある篠栗の多くの滝では、古くから半僧半俗の修行者が水垢離の場として行を積み、霊場を生み出す基盤になったことと思われる。そして現在でもなお水行をする人びとの存在を見るにつけ、霊場創設以後も篠栗の庶民信仰を醸成する大きな要素となっていたことは否めない。

2) 不動信仰の場としての篠栗:

多くの滝行場をもつ篠栗は不動信仰のメッカでもある。本尊が不動明王であるのは「本四国」と同じく、36番・天王院(波切不動明王)、45番・城戸の滝不動堂(不動明王)、54番・中町延明寺(不動明王)の3札所であり、これは創設時から変化はない。しかしその他にも1番・南蔵院の大不動明王はあまりにも有名である。43番・明石寺の赤不動(厄除波切不動)、5番・郷ノ原地蔵堂の不動明王、33番・本明院の日切り不動など大小の不動像もある。どの札所にも必ず十三仏は安置されているが、その第一番には必ず不動明王が置かれている。また篠栗霊場の滝の上下には必ず不動像が置かれて、不動像がない札所は全くない程、不動明王は霊場の重要な信仰の対象となっている。

3) 大師信仰の場としての篠栗:

「本四国」は弘法大師の足跡をたどる巡礼であるため、人びとの意識のうえでは本尊そのものの意義は薄いと考えられる。従って、本堂の他に必ず大師堂を設けている。篠栗霊場でも1

番・南蔵院、10番・切幡寺、14番・二の滝寺、18番・篠栗恩山寺、61番・山王寺（子安大師堂）、65番・三角寺のように寺院形式をとる比較的大きい札所は、本堂の他に大師堂を建立しているが、38番・丸尾観音堂、51番・中町薬師堂、57番・田ノ浦栄福堂、63番・天狗岩山吉祥寺のように、小さな祀堂でも独立した大師堂を設置している札所がある。しかし一般には、小さい祀堂は本尊の隣の最も重要な場所に大師像を安置している。また祀堂などの内外に多くの大師像も建立されており、それも修行大師、鯖大師（14番・二ノ滝寺）、橋の下の修行大師（87番・弘照院）、（写真1参照）300体を越す大師座像のある誓願堂（80番・田ノ浦観音堂）、身代わり大師（13番・城戸大日堂）などいろいろな名称と宗教的機能を有している大師像がある。このうち13番札所には、昭和15年7月15日の日付と「橋本イソ 同行」の銘のある「綱救身がわり大師由来」の献額が掛かっており、大師のお陰で海難から救われた経緯が絵入りで物語られている。また西氏は、かつて篠栗の婦人会に「おはつか」という大師講があり、女性が弘法大師の絵像を吊って集まり、お参りをしていたと語られた。

4) 十三仏信仰および祖先崇拜の場としての篠栗：

篠栗の各札所に、本尊や大師像以外に必ず安置されているのは十三仏である。十三仏を祀るのは死者の冥福を祈るという信仰であるが、ここでは十三仏の最後に弘法大師像が置かれ、十四仏となっている札所が多いのが特徴である。

篠栗霊場の大部分の寺院は札所の祀堂から発展したもので、本来、檀家をもたず、経済的には信者の自発的な信仰に頼っている。札所のなかで最大の信者動員力をもつのは、1番・南蔵院と、次いで16番・呑山観音寺であろうが、南蔵院住職夫人の話では、同院でも檀家は断っているので現在はおよそ20軒を有するのみであるが、最近では葬式も少しは頼まれるという程度である。それ故、水子地蔵はあっても、ほとんど墓地というものが各寺院にない。ただ最近では南蔵院も納骨堂を作り、檀家制度を取り入れようとする傾向も僅かながら見られる。このように伝統的な祖先崇拜に満足せず、むしろ現世利益に徹したところが、寺院祀堂を維持するためにかえって真剣に信者に対応することになり、ひいては篠栗霊場をこのように発展させることになったのであろう。

5) 地蔵信仰の場としての篠栗：

篠栗霊場では、本尊が地蔵菩薩である札所は5番・郷ノ原地蔵堂、19番・篠栗地蔵堂、20番・鶴林寺、25番・秀善寺、56番・松ヶ崎地蔵堂の5札所に過ぎないが、その他の札所には特徴ある地蔵像が祀られている。例えば、13番・城戸大日堂の「立江地蔵」、36番・天王院の「延命地蔵」、57番・田ノ浦栄福堂の「修行地蔵」「親子地蔵」「延命地蔵」、62番・遍照院の「病立切地蔵」「子育て地蔵」、78番・山手阿弥陀堂の「日限地蔵」、80番・田ノ浦観音堂の「日切地

蔵」「手足守地藏」、85番・祖聖大寺の「お抱え地藏」「大学地藏」など実にさまざまな宗教的機能をもつ地藏が人びとの信仰対象になっている。また現代、寺院との関わりの深い宗教現象の一つは「水子地藏」を祀ることである。この地藏が全国的にブームとなったのは、日本の経済発展が著しくなった昭和40年代からだと言われるが、高度経済成長に伴う少子家庭の産物として生まれたものだろう。この篠栗霊場でも1番・南蔵院、16番・呑山観音寺、36番・天王院などは、供養のため大規模に水子地藏を建立している。

また地藏については、六地藏信仰がよく知られているが、全国的にはしばしば寺院や墓地、辻などに安置されている。元来、六地藏は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道の入口に立つ地藏菩薩を意味し、死後、人びとがどの世界に生まれ変わっても地藏菩薩の救済があるという信仰である。しかし1番・南蔵院や16番・呑山観音寺には「わらべ地藏」と銘打って、現代的な可愛い造形の地藏像が置かれ、名物となっている。また同じく南蔵院では、10cmほどの正方形の銅板に2体の地藏を打ち出した「仲良し地藏」なるものを作り、「お参りの記念」として、また「次に来るあなたをお地藏さんがお迎えしてくれます」という言葉で人びとに寄進を呼びかけ、「わらべ地藏」に接する「七福神トンネル」の壁一面に貼り付けている。そして従来、どちらかといえば暗い地藏のイメージを、子供の成長やカップルの愛情祈願などとして受け止める明るいものに変身させている。

6) 淡島信仰の場としての篠栗 :

和歌山市加太の淡嶋神社は、婦人病の治癒・安産・裁縫上達・縁結びなどに霊験があると信じられている。全国的に信仰が広まったのは近世、淡島願人という遍歴の宗教者が布切れの下がった厨子を背負い、祭文を唱えて布教したためである。篠栗霊場では28番・大日寺、85番・祖聖大寺、87番・弘照院などの境内に淡島堂があり、櫛・ヘアピン・スカーフなど女性の持ち物や人形などが納められている。大日寺へは、昨年(1995年)3月3日の桃の節句に偶然、筆者が立ち寄ったところ、午後12時から淡島堂でお祭りがあり、堂前で正座した女性たちが経を唱えていた。(写真2参照)一方、独立した祀堂ではないが、本堂の内外に淡島像を祀っている札所も多い。例えば、2番・松ヶ瀬阿弥陀堂は淡島さまの札所として知られ、堂内では本尊の阿弥陀如来を中心に大師像と並んで淡島像が安置され、人形などが奉納されている。この札所は平成4年に現在地へ移転したが、かつては博多などの花柳界の女性たちによる参詣で賑わったという。¹³⁾ また伝承では、弘法大師の住坊であったとされる若杉山の金剛頂院にもかなり立派な淡島堂がある。

7) 祈禱の場としての篠栗 :

篠栗霊場で注目を集めるのは祈禱師の存在である。祈禱師とは神仏霊と交流し、その言葉を

お告げとして人びとに伝える役目をする人のことである。西氏の話では、明治20年頃、62番・遍照院の守堂者であった田代九太郎氏は「神おろし」をしていたという。そして明治22年に福岡―香椎間の道路改修工事が行われたとき、篠栗から先が難工事のため多くの負傷者がでた。そこで田代氏に祈祷をしてもらったところ、以後、怪我人が減少したということである。現在では、28番札所・大日寺の守堂者・庄崎良清氏（俗名・清子）が祈祷師としてよく知られている。氏は平成3年、家業をたたんで博多から篠栗へ転入し、1番・南蔵院で得度した後、現札所の守堂者となった人である。祀堂を管理する一方、境内の待合室で、病氣、商売、家族、縁談などに関するさまざまな相談を受けている。従ってこの札所へやって来る人びとは、霊場巡拝者と祈祷依頼者の2つに別れ、後者からは庄崎氏の信者グループが形成されているという。¹⁴⁾

8) その他：

篠栗町では、「新四国」創設以前から「お十七夜」と呼ばれる観音講が存在した。観音信仰は特に女性を中心に信者が多かったと想像されるが、一方、西氏によると、ここは久山町上久原（旧・久原村）にある安楽寺（浄土真宗西本願寺派）門徒の多い土地柄として知られていた。この地方の米搗き歌に「山田山ん中、久原は都、花の篠栗は後生どころ」という歌詞もあったほどである。そこへ真言宗ゆかりの「新四国」を創設しようとしたので、当初は旧村民の間に抵抗があったと聞く。その一方で、87番・弘照院は天台宗の寺であり、今でも荒神祭が行われている。また地神（じがみ）の文字を彫った石碑が、25番・秀善寺、16番・呑山観音寺（地神三六神）はじめ、幾つかの札所境内でも見受けられる。

このように篠栗霊場は不動信仰、大師信仰、十三仏信仰、地藏信仰、淡島信仰などとともに観音信仰、阿弥陀信仰、荒神信仰をも取り込んでいることが理解される。そしてまた63番・天狗岩山吉祥寺はその名の通り、天狗堂や没の行者堂を擁し、明らかに篠栗四国開創以前の山岳信仰の影響を想像させる。加えて「見ざる・言わざる・聞かざる」を寓し、仏教の教義とは無関係な三猿（30番・田ノ浦斐玉堂）、恵比須像（18番・篠栗恩山寺）、蛇像あるいは巳さん（30番・田ノ浦斐玉堂）、山の神（85番・祖聖大寺）、金精様（25番・秀善寺近くの道）なども信仰の対象となっている。さらに28番・大日寺には2体の聖母マリア像さえあり、篠栗霊場へ行けばありとあらゆる民間信仰的な神仏像に出会えると言っても過言ではない。

（8）信仰表現

前項で篠栗霊場の実情をみてきたが、では霊場を訪れる巡拝者の実態はどうか、次に霊場に託す人びとの思いを探ってみよう。

1) 仏像の寄進：

篠栗霊場の特徴の一つは、驚くほどの仏像の氾濫である。数少ない例外は、1番・南蔵院の昨年完成した釈迦涅槃像の周囲と、整然とした趣の36番・呑山天王院である。しかしいずれは他の寺院の境内と同じ状態になる可能性はある。それでは篠栗霊場で何故それほど多くの仏像が安置されているのだろうか。それは霊場における信者の最大の信仰表現が仏像の寄進であり、霊場創設以来、絶えず信者による石造の仏像が堂内や境内を埋め尽くし続けてきたからだと言える。勿論、他の仏寺のように、殿舎の改築、屋根の吹き替え、仏具調度品の新調などにも信者の寄進が行われているのであるが、直接的な崇拝の対象である仏像に自分の名前を刻み、寄進することに人びとは宗教的意義を認めているのであろう。

また一方で、篠栗霊場は21の寺院と、守堂者が管理する67の祀堂から構成されているが、この素朴な雰囲気をもつ祀堂の多さが、巡拝者にとって「敷居の高くない」霊場になっている。ここでは本尊像や大師像を格子越しでなく、至近距離で「履物を履いたまま」拜むことができるからである。そしてこれが霊場に対し親近感をいただく理由の一つでもある。西氏によると、明治32年に南蔵院が篠栗に迎えられて以来、各札所には仏像寄進の希望が相次ぎ、荷車に仏像を乗せて博多から行列を組んで運んで来たと言われる。そして明治期を過ぎても仏像の寄進は絶えず増え続け、なかには寄進という形をとらず、無断で寺院や祀堂に仏像が持ち込まれることもよくあるらしい。現在でも幾つかの札所では、明らかに仏像の持ち込みを禁止する立て札を置き、巡拝者の注意を集めている。例えば、「本堂に神仏様の持ち込みを禁ず。本堂に貼紙を貼る事を禁ず」(18番・篠栗恩山寺)「この霊場に許可なく神仏を持ち込まれますと後々災難や事故にあわれますので許可なく神仏を持ち込まないようお願いします」(63番・天狗岩山吉祥寺)「1. 貼張一切御断りします。お札はお札箱に入れて下さい。1. 古い佛像一切持ち込みは御断りいたします」(24番・中ノ内虚空蔵堂)などがそうであるが、あまり効果はあがっていないように思われる。

2) お百度とはだし参り：

祀堂ではなく規模の大きい寺院形式になった札所では、その多くに「お百度石」を見かけるので、今でもお百度を踏む人がいると想像された。実際、昨年の訪問時、78番・山手阿弥陀堂境内の日限地藏堂では、積雪のなかを素足でお百度を踏んでいる女性を見た。28番・大日寺でも、境内の閻魔堂で年配の女性が熱心にお百度を踏んでいるのに出会った。西氏は、昔は「はだし参り」の人たちが多かったと述懐されていたが、今年は16番・呑山観音寺で、若い女性二人が素足で参拝をしていた。通常、お百度を踏む場合、数を間違えないために百本の紐を束ねたような道具が必要であるが、14番・二の滝寺では、コの字型の鉄の棒に百枚の鉄片を通してある道具が準備されていた。

3) 絵馬：

一番・南蔵院、16番・呑山観音寺、33番・本明院、62番・遍照院など規模の大きな寺院では、全国の寺社と同じように、その寺の名前の入った絵馬が販売されており、それに願い事などを書いて所定の場所に吊るすのはどこも同じである。しかしもう少し素朴な絵馬が見つからないかと探したところ、19番・篠栗地藏堂に同一人が奉納したと思われる「拝み絵馬」が3枚あったのは興味深かった。(写真3参照)ただ16番・呑山観音寺の塔頭として、水子供養に建てられた極楽往生院の絵馬は、さすがにどこにもある進学祈願の絵馬ではなく、父母が、あるいは恋人と思われる二人が、産めなかった水子に対する呼びかけや赦しを乞う言葉ばかりで何故か身につまされた。その他狭義の絵馬ではないが、願い事を書いて堂内の壁に張り付けた白い小さな紙片はどここの札所にも数多く見られる。これは既製の絵馬を販売していない小さい祀堂には特に多い。なかには眼病治癒祈願のために「め」の字を多く書いたもの、足の病治癒祈願のため「足」の字を多く書いたものなど、絵馬と同じ表現方法を取るものも多く見られる。

4) 賽銭と撒米：

既に述べたように、霊場には膨大な数の仏像が祀られているので、巡拝の人びとは頭陀袋(「さんや袋」とも呼ぶ)にたくさん1円貨幣を入れて札所を廻る。本尊像の前には賽銭箱が置いてあるが、群小の仏像の前に置いてあるのは、細長い木箱や台所用のビニール製のザルであり、それらに順に手早く入れて廻る。全国的神社仏閣で1円玉が一番多く納められる所は篠栗であり、篠栗町の銀行は西日本で一番1円貨幣が集まるということを聞いたことがある。確かに少々の準備では足りないので、1番・南蔵院の入口に近い所では無人の両替所があり、木箱に一杯の1円貨幣が入れてあり、「両替 御自由に」と書いた立て札がくくりつけてある。そして1円玉の次に多い奉納物は洗米である。西氏の記憶では、昔の遍路は洗米5合を「さんや袋」に入れて、仏像の前に供えて廻った。そしてこの供えられた洗米を集めて米味噌を作ったり、粉に挽いて団子を作り、茶店で遍路に売ったりしたということである。現在はマヨネーズの空いたビニール容器に米を詰めて、手早く米を撒いて歩く。(写真4参照)1993年の訪問時、79番・普陀落寺では大量の米が筵の上に広げて干してあった。また去年は、84番・中町屋島寺では洗米を一杯200円で無人販売していたが、これは、「本四国」で遍路が接待で貰った米や、北国の瞽女が貰い集めた米などに霊力があると信じられ、人びとが喜んで買う習俗と同じことであろう。

5) 灯明と線香：

どの札所でも線香と共に献灯用に赤白の蠟燭が売られているが、特に興味深いのは赤い大きな蠟燭であり、そこに願い事を書いて献じ、その成就を祈る。

6) 手形・足形：

10番・切幡寺、31番・城戸文殊堂、61番・山王寺のように、木製の手型・足型を売っている札所がある。それらの奉納は小さい祀堂でもかなり見受けられ、病氣治癒の祈願を切実に感じさせるものである。

7) 納札：

篠栗霊場では団体用納札がよく見られる。個人の場合は巡拝回数によってその色が異なる。西氏によれば、納札は4回巡拝までは白札、5－7回は緑札、8－20回は赤札、30回は銀札、50回は金札で、それ以上は錦札で、特に銀札以上はお守りになるので、これを千切って飲む。その結果、食道癌が治った人がいたとのことである。しかし納札箱を見てもたまたま赤札がある程度で、それ以上の札は殆ど見つからなかった。巡拝回数については、40番・一の滝寺に「百回塔」の記念碑があるが、距離的に近い博多など北九州地区の人たちは2、3日で参ることができるので、毎月参る「月参り」の習俗もある。このように何度も参る信者が多いので、納札から巡拝回数を推測するのは無理がある。

8) 千枚旗：

千枚旗は「死者の冥福、あるいは心願成就を祈って一枚一枚、丁寧に作られて、大地に刺される」¹⁵⁾ものである。2、3年前には白い花の群生のように若杉山頂の奥の院近くで見られたが、(写真5参照：ここでは「家と土地を授けてください」の文言が記されている。)現在は取り払われている。1番・南蔵院の大涅槃像前には、千枚旗を挿すコンクリートの囲いが作られている。同院では赤と紫の2種類の旗が売られ、赤は祈願のため、紫は感謝のためと説明されていた。これなども民間習俗の摂取と考えられる。

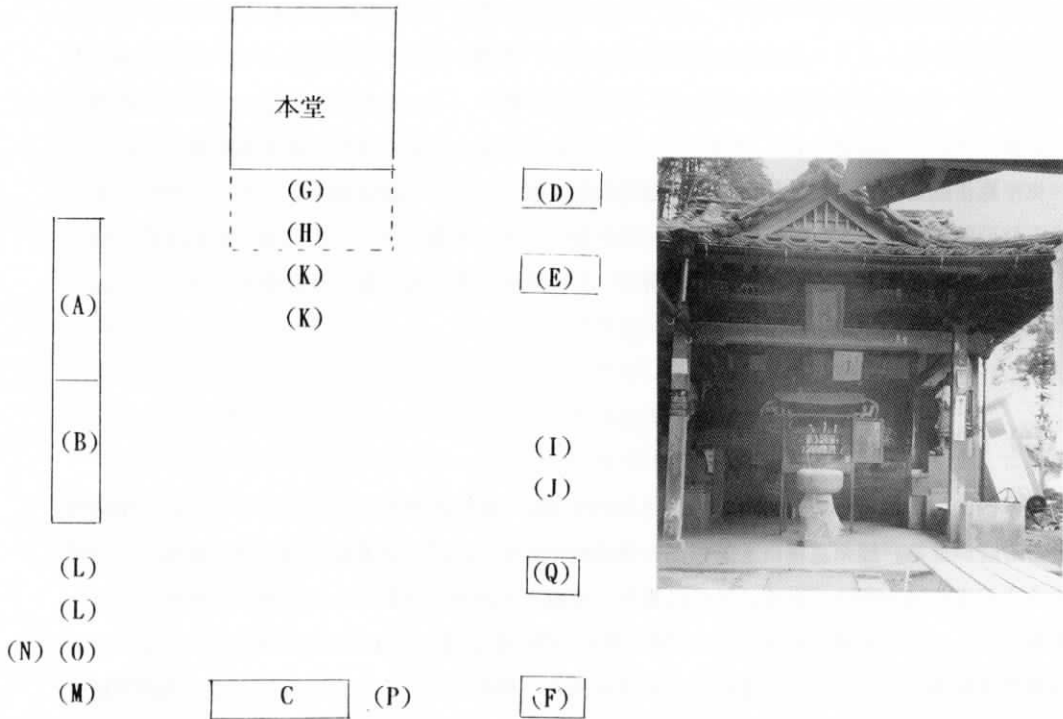
9) その他の奉納物：

人形や写真は比較的多くの札所で見かける奉納物であるが、奥の院ではスクリーや蛸壺が納められ、漁業関係者の奉納であることがわかる。また特に人目を集めるものは52番・山手観音堂の「芳名大師尊影」である。これは旅の僧・毛利純堂が寄進者10万人もの名前で画いた縦5mほどの大師像である。その他変わったところでは、61番・山王寺にある無法松の人力車であろう。

以上のように、篠栗霊場では実に多くの信仰表現が見られるが、そこには神仏や弘法大師に託した人びとの素朴な願いや感謝の気持ちが凝縮しているように思われる。ここで一つの札所に焦点を当て、そこに安置されている仏像の種類や数および奉納物などを調べてみた。札所のなかでは、規模の最も小さな部類に入る19番・篠栗地藏堂を選び、そこにあるもの全てを記録

したのが以下の表である。調査日は1996年3月10日である。

上町の篠栗地藏堂は、JR篠栗駅と筑前山手駅の中程に位置する。国道201号線に沿って守堂者の自宅の角を曲がると石段が見え、その上に建てられている。この地藏堂は昭和28年の大水害の後、守堂者とともに歩いて30分の現在地へ移転している。初代守堂者は、嘉永年間に藤木藤助たちと霊場開創に尽力した日ノ浦伊助であり、現守堂者はその5代目に当たる。やや薄暗い本堂は間口4m、同行き6m（内、2mは内拝）ほどの広さである。祀られている神仏像は、本尊の地藏菩薩とこれに並んで21体の地藏菩薩、金欄のよだれ掛けをした六地藏、不動明王2体、弘法大師1体である。狭い境内にはさまざまな仏像が安置されており、次のような配置になっている。



- (A) 不動明王1体+地藏菩薩11体+観世音菩薩3体
- (B) 十三仏+不動明王+弘法大師 (C) 地藏菩薩15体+不動明王1体
- (D) 地藏菩薩3体 (E) 不動明王 地藏菩薩 仏像（摩滅のため不明）各1体
- (F) 地藏菩薩5体+建立者・日ノ浦伊助像 (G) 奉納経箱 (H) 燈明台と線香立て
- (I) 香炉 (J) 観世音菩薩立像（野天）1体 (K) 地藏菩薩（野天）1体
- (L) 地藏菩薩2体 (M) 修行大師2体 (N) 高い所に不動明王1体
- (O) 灯籠 (P) 十三仏奉納碑+本堂修築寄付芳名碑 (Q) 地藏菩薩1体

このように境内だけで65体の神仏像があり、堂内と合わせるとその数は100体を越える。堂舎の外には奉納経箱が置かれている。次に本堂の外壁や柱に張り付けたり、取り付けてあるものを列記する。

(1) 札所表札(霊場会で作成した全札所共通のもの) (2) 御詠歌額 新旧2枚 (3) ブリキ製団体納札2枚 (4) 手書き紙製納札2枚 (5) 奉献者の木札納札25枚 (6) 千社札19枚(内、板製1枚)

また堂内に置かれたり、貼付されているものを列記してみる。大部分はここ数年来のものである。

(1) 善根の証44枚を貼った額 (2) 朱塗りの盃を張り付けた奉納額 (3) 団体の納札12枚(内、手書きのもの6枚) (4) 布旗の納札1枚 (5) 写経した般若心経21枚 (6) 良縁祈願1枚 (7) 結婚達成祈願(内妻より)1枚 (8) 安産祈願1枚 (9) 進学祈願2枚 (10) 合格祈願1枚 (11) 就職祈願1枚 (12) 脂肪が取れますように(祈願)1枚 (13) 厄よけ1枚 (14) 「足・足・足」と書いた足の病気平癒祈願1枚 (15) 病気平癒祈願1枚 (16) 美容室商売繁盛祈願1枚 (17) 心願成就御札1枚 (18) 古風な人形の貼り絵1枚 (19) 手製のくす玉1個 (20) 草鞋1足 (21) 拝み絵馬3枚(同一人が3年連続奉納) (22) 接待の菓子(「お接待です 御自由にお取りください」と書いてある)

(10) 霊場の流動性

「本四国」には、88カ所札所には含まれないが、「番外札所」として人びとの信仰を集めている寺院がある。篠栗霊場にも若杉山の奥の院や仏岩、山手の常喜院をはじめ、番外と名付ける寺や祀堂が10カ所ほどある。さらに番外にも数えられないけれども、路傍の小堂や、小堂とも言えないような普通の民家で、戸を開け放ち、神仏像を部屋に並べて賽銭箱を置いている「番外札所予備軍」ともいうべきものがたくさんあり、興味深い。その一つを筆者は筑前山手駅近くの民家で見したが、そこでは道路沿いの応接室に小さな淡島像などを安置し、その前に賽銭用のザルを並べていた。またそこからほど遠くない、国道201号線沿いの石材店でも、観音像、蛇像、尉と姥の置物などを窓越しに置いていた。(写真6参照) 実際に巡拝者は札所への往来に、それらの神仏像にも丹念に1円玉や米をあげていくのである。巡拝者にとっては、民家の私設に安置した神仏像も、霊場を形成する群小の神仏像の一つとして、あまり違和感をもたず受け入れられているようである。しかしそのような現象が生じるのは、霊場が繁盛し、札所が経済的利益を齎すという現実と無関係ではなからう。土地や家屋を伴わない札所の番号の権

利のみが大変な高額で売買されるという信じられないような噂さえある。このような状況下、1987年に荒田にある(あった)75番・善通寺が福岡地裁に訴訟を起している。これは霊場会を除名された善通寺が、名誉棄損として霊場会および南蔵院を相手取ったものであり、すでに地裁、高裁で敗訴し、最高裁でも善通寺が敗訴する判決がでている。霊場会側は新たな75番札所を荒田の入り口に設けたことから、現在では75番と称する札所が2つも存在するという奇妙な事態になっており、はからずも霊場内の複雑な問題を表出させている。

篠栗霊場の特徴の一つは、札所がいかに流動性をもっているかということである。霊場創設から今日まで、札所の位置や所有者および祀堂の管理者が目まぐるしく変化していったが、51番・中町薬師堂のように今秋に移転を予告している札所もあり、今後もその傾向は続きそうである。勿論、これには水害や(19番・篠栗薬師堂)ダム工事(44番・大宝寺)のため移転せざるを得なかった事情などもあるが、札所の権利の移動が激しいこともその一因である。そのため、この流動性は「本四国」など他の札所では見られない歴史の新しい「生きた札所」としての特質を示しているとも言える。また霊場をめぐる社会的な変化も見逃せない。1番・南蔵院の大釈迦涅槃像が昨年、落慶したことはすでに述べた。その後、これは福岡ドームや太宰府天満宮と並ぶ博多三大観光名所の一つに数えられ、週末はこの像を見ようと押し寄せる車のため同院の周囲では道路渋滞が起きるそうである。¹⁶⁾ 南蔵院や吞山観音寺のような有力寺院への参拝者の増加が、霊場全体の隆盛につながっているとは言え、「観光客はふえても、篠栗に来るお遍路さん全体の数は減っている。88カ所で参拝客を奪い合っているような状態」だと嘆く声もある。¹⁷⁾ そしてよく整備された大寺院と多くの小さな祀堂との格差はますます広がり、規模的に同じ霊場の札所どうしとは思われないような違和感を感じさせる。

「本四国」をはじめ多くの霊場は、今や巡礼の観光化によって再び繁栄の時代を迎えたと言われている。その点ではこの篠栗霊場は、現代的なアイデアを摂取した結果、どこよりも観光化に成功した札所の一つに挙げられる。しかもなお、小さい祀堂に昔ながらの素朴な霊場の姿が色濃く残っているという点では貴重な存在と言えよう。

以上、篠栗霊場の発展要因を検討し、霊場の実状を調べてその特徴を抽出した。しかし本稿は篠栗霊場に限定して分析したため、それぞれの特徴を産み出した要因が何であるのかという問いには答えていない。これは小豆島や知多半島などに設けられ、現在繁栄している「新四国」霊場を視野に入れて検討すべきであろう。残された課題については今後さらに分析するつもりである。



(1) 橋の下の修行大師 (8番・弘照院)



(2) 淡島さまの祭り (28番・大日寺)



(3) 拝み絵馬 (19番・篠栗地藏堂)



(4) マヨネーズの空容器に詰めた米を奉納する巡拝者 (16番・呑山観音寺)



(5) 千枚旗 (奥の院付近)



(6) 「番外札所予備軍」(筑前山手駅付近)

(註)

- 1) 篠栗文化財専門委員会編 昭和57年 p.200
- 2) 西 義助『ささぐり くらしの四季』(手書きコピー印刷)昭和57年 p.115、p.118
- 3) 奥村玉蘭著・田坂大蔵校訂 文献出版 昭和60年 pp.795-796
- 4) 西 義助『こどもの四季』旧筑前部の生活誌② 不知火書房 平成4年 p.167
- 5) 『ささぐり くらしの四季』p.16
- 6) 町史編集委員会編 田川郡糸田町 平成元年 pp.940-942。なお朝日新聞福岡総局編『続・博多い
まむかし』によれば、篠栗霊場の最盛期は、昭和4、5年頃であると記している。(p.116)
- 7) 大島村教育委員会編『大島村史』大島村 昭和60年 p.594
- 8) 中野紫葉『新四国八十八ヶ所巡拜』福岡日日新聞社 昭和10年 p.113
- 9) 井上優『篠栗八十八カ所霊場めぐり』西日本新聞社 平成5年 p.76
- 10) 為遊女供養
隻親糊口独暗然 往年苦界真耐憐
宿縁難忘正威楼 称名供養霊場辺
昭和四十七年八月三日
楼主息 (氏名)
- 11) 現在でも1番・南蔵院では毎月「魚供養」が行われ、漁業関係者で賑わう。
- 12) 『篠栗町誌 歴史編』p.242;九州歴史資料館編・発行『筑前粕屋若杉山の仏教遺跡』昭和61年 p.31
- 13) 『篠栗八十八カ所霊場めぐり』p.93
- 14) 谷亀利一編『九州・篠栗霊場の旅-弘法大師の世界-』読売新聞社 昭和61年 p.64
- 15) 『アサヒグラフ』3847号 朝日新聞社 平成8年 p.12
- 16) 同上 p.21
- 17) 同上 p.23